

活動分野	森に親しむ講座		
タイトル	よみがえる鎮守の森～土地本来の木によるふるさとの森		
実施日時	平成29年4月27日（木）10時～12時		
実施場所	千葉市民会館		
受講者	47名	FIC会員他スタッフ	13名

活動の内容



鎮守の森は、高木層、亜高木層、低木層、草本叢が一つのセットになった多層群落を形成し、しかも構成する樹種はその土地本来の木で、「ふるさとの森」が残されています。鎮守の森から、宮脇昭のドングリの森づくりまでについて講話しました。概要は次の通り。



1. かつて、日本の土地の大部分は常緑広葉樹に覆われており、シイ、タブ、カシ類がその土地本来の樹木（潜在自然植生）であった。宮脇昭氏はドイツ留学から帰国後、日本の潜在自然植生を知ることが鎮守の森に残されていることをつきとめた。鎮守の森は聖なる森で、みだりに人の手を入れられることなく、その土地本来の素顔、素肌の植生が保たれていたからである。

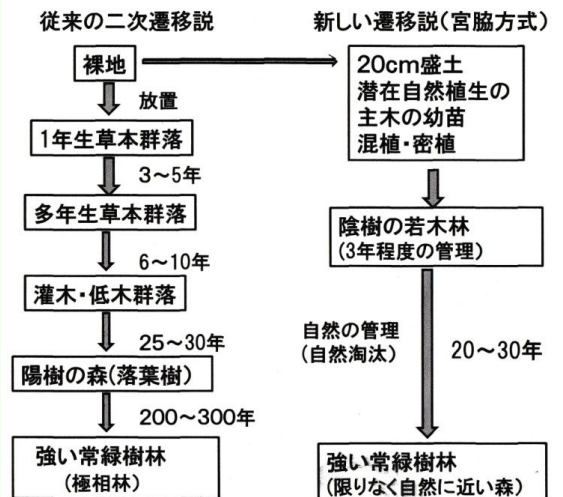
2. 土地本来の木の照葉樹は、突然襲ってくる台風、地震、火事などの災害に強く、いのちを守ってくれる力を持っている。しかし、シイ、タブ、カシ類は深根性、直根性のため裸苗のままでの活着が難しいといわれていたが、ポット苗が開発されて移植が可能になった。ポット苗づくりのステップは、鎮守の森を丹念に調査して潜在自然植生の主木になり得る樹種を選定し、そのドングリ(種子)を拾ってきて育苗箱に播種する。幼苗を育ててからポットに移植し、それを育苗トレイに並べて、根群を充満させ、健全なポット苗になるまで育てる。

3. ポット苗による森づくりは、対象地に20cmの客土をして植栽準備をする。植栽は潜在自然植生の主木となる幼苗とそれを支える木の幼苗を混栽・密植をする。幼苗はポットから外し、決して深植えはしない。植栽後は2～3年間の雑草取る必要があるが、その後は自然の掟の管理にまかせる。従来の遷移説に基づく段階的な方法では、裸地から自然の森に回復するまでに200～300年かかるが、宮脇方式では土地条件さえ十分であれば20～30年で自然に近い森になる。



宮脇昭氏

4. 宮脇昭のポット苗による「ふるさとの森」づくりは、製鉄所の森づくりを皮切りに、産業立地、商業施設、ニュータウンなどに防災・環境保全林づくりを多く行った。また、海外では中国・万里の長城の森を蘇えらせ、ボルネオやアマゾンの熱帯林を再生させた。世界中に3000万本の木を植えて、日本一多くの木を植えた男と呼ばれている。



(宮脇『鎮守の森』より引用作成)